

原住民作家のパタイが描いた 琉球人遭難事件——『暗礁』

巴代著／魚住悦子訳
暗礁

下村 作次郎



四六判 402頁
草風館
[本体 2,800円 + 税]

私たちの台湾認識にどの程度浸透しているかは不明だが、

台湾には多数の原住民が存在する。かつては、日本人類学者の説を踏襲して九族に分類されていたが、現在では政府から一六族が原住民として認定されている。一方、もともと台湾に住んでいた民族には、他に一七世紀初頭のオランダ以来の外来政権による支配のなかで漢化していった平地に住む民族がいて、彼らは平埔族と称されてきた。平埔族はおおよそ十数族とされており、このように台湾には驚くほど多数の民族が存在した。そして、いまも存在しているのである。

ここで取りあげる『暗礁』は、この原住民一六族のうちのパイワン人と琉球人（主として、宮古島人）とのあいだに起こった事件を描いた長編小説である。作者のパタイ（巴代）は、原住民のプユマ人で、一九六二年に、台東県卑南郷泰安村

タマラカウ（大巴六九）部落に生まれた。

この事件は「琉球人遭難事件」や、あるいは「宮古島島民遭難事件」「八瑤湾事件」「琉球漂流民殺害事件」「琉球漁民殺害事件」などと呼ばれ、さらには一八七四年五月の西郷従道による台湾出兵（征台の役）あるいは「台湾事件」とも呼ばれる）までを含めて牡丹社事件とも称されるが、事件の内容は次の通りである。少し長いが、『暗礁』の訳者、魚住悦子氏の「解説」より引用する。

一八七一年（農曆）十一月、宮古島の船が台風に遭って漂流し、台湾南部恒春半島の東海岸、八瑤湾で座礁した。この船には、琉球王国に納税して首里から宮古島に戻る島民や首里の商人ら六十九人の琉球人が乗っていた。座礁した船から岸に向かう際に三人が溺死したが、

残りの六十六人は無事に台湾に上陸した。上陸後、一行はふたりの漢人と出会うが、所持品を取りあげられ、その行動に不信を覚えて彼らと別れ、その夜は海岸近くで野営した。翌日、漢人の集落があるという西海岸の方向へ向かうが、「大耳生番」(パイワン人)の畑に出た。芋を盗み食いしているところを発見され、パイワン人に案内されて山地にある部落クスクス社にたどり着く。部落では食べ物と宿を提供されたが、夜半、侵入して来た男に衣服を奪われた。朝になるとクスクス社の人々は猟に出かけたが、殺されるのではないかと疑心暗鬼になった琉球人は部落の人々の制止を振り切って逃げ出した。一行は西へ逃げて双溪口にたどり着き、そこに住む漢人に助けを求める。しかし追って来たクスクス社と牡丹社の男たちとのあいだで衝突がおこり、五十四人が殺害された。かろうじて生き延びた十二人は、その後、平地の漢人に保護され、鳳山にある清朝の役所を経て台湾府城(現、台南)に送られた。さらにその後、大陸福州の琉球館を経て、翌年、琉球に帰還した。

右記のように、事件は、一八七一年(明治四)年農曆一月二日(新暦二月二三日)の夜の八瑤湾での座礁から三日後に、恒春半島の山中の双溪口で起こったが、小説はこの四日間の

人々のようす―外面的な行動と内面的な心理―を丹念に描くことで成り立っている。全三四章から成るが、章立てに講じられた手法は、奇数章と偶数章をそれぞれ前者は琉球人の章、後者はパイワン人の章と二分して描き、双方を共鳴させながら、双溪口でクスクス社と牡丹社の「勇士」によって五四人の琉球人が殺害される第三三章までが描かれ、終章の第三四章では、その一か月後の何事もなかったかのようなパイワン人の若者たちの日常が描かれている。

主な人物は、琉球人の章では、宮古島下地村出身で「宮古島の第一流の拳士」とされる野原茶武が主人公の役割を担っている。彼には浦という名の妻とふたりの子どもがいる。野原はこの妻や子どもが住む下地村の漁村をよく思い出すが、それはクスクス社の日常生活と対称的に描かれている。他に、宮古島の島主の仲宗根玄安、与人(村長)、目差(副村長)、筆者(村幹事)、随員(島主の随員)、そして船長や船乗り、首里の商人や役人が顔を出す。一方、パイワン人の章では、若い世代のカルル(クスクス社の大頭目の後継者)、アルク(牡丹社の大頭目の後継者)、そしてアディボン(シナケ社)が中心人物となっているが、そのなかでアディボンは作者を投影した虚構の人物として描かれている。登場人物は、他にチュルイ(クスクス社の大頭目)、ジリュウ、ウライ、チュウク(以上、

クスクス社の若者」などがある。

さて、パタイはこのような構成で、どのようにこの事件を描いたのだろうか。

琉球人の章は、首里への納税船が冬にはめつたにない台風遭遇して漂流し、座礁した描写からはじまる。座礁した場所は、「宮古島の西南にある大きな島で」、「台湾の東部か、南部」だということになり、人々のあいだに不安が広がる。その不安とは、野原がかつて船乗りたちから聞いたという言い伝えで、「この島には人食い人種が現れる」というものだった。この言い伝えは、一度、野原の心に浮かぶと片時も消えなかった。「宮古島や琉球の人々のあいだでは、台湾は生番が出没し、人を殺して食うところだと言いつたにいられた」と。このような言い伝えは、ひとり野原だけでなく、不安と飢

えに襲われている島主や船長たちの心にもあらわれ、言い知れぬ恐怖となつて琉球人のあいだに広がっていった。パタイは、その底知れぬ恐怖心を、野原の心理描写や、島主の仲宗根玄安の怯える姿、さらに船長と村長や商人との言い争いなどの描写を通じて、凄惨な事件を生みだした大きな要因として描いている。

一方、パイワン人の章は、台風が過ぎ、仕掛けたワナに獲物がかかっているかどうかを見に出てきたジリュウ父子をはじめ、八瑤湾を見下ろす丘に向かうカルルやアディボンたちの描写にはじまり、次の第四章で座礁した船を見つけたようすが描かれる。カルルはめずらしいほど大きな船を見て交換できるものを物色し、見聞の広いアディボンは近隣で起こった海難事故を思い出す。それは、年寄りたちから聞いた、半

六朝期における仏教受容の研究

遠藤祐介 著 第一部「六朝期知識人の宗教的関心と仏教受容」 第二部「三教論争における諸問題で新事実を実証的に解明し、結論では中国人の主體的な仏教受容を提示。」
六朝文化以外にも日本の仏教伝来とも直接関連する基礎的研究である。

■9074円

漢帝国成立前史

柴田昇 著 —秦末反乱と楚漢戦争—
陳勝呉広の乱から楚漢戦争の終結までの歴史的過程を再検討し、統一王朝誕生の実像に迫る。 ■2000円

近世東アジア比較都城史の諸相

新宮学 編

妹尾達彦・桑野栄治・中村篤志・久保田和男・渡辺健哉
張学鋒（小尾孝夫訳）・橋本義則・馬彪・成一農 著

近世東アジアの都城および都城制に関する共同研究成果を収録。特に北京をはじめとする近世都城を中心に、歴史学的方法に考古学や地理学的知見を加えて、政治史、社会史、歴史地理、考古学、環境史、儀礼研究など多様な研究視角から分析した。 ■6286円

白帝社

※価格は税別

〒171-0014 東京都豊島区池袋 2-65-1
TEL 03-3986-3271 FAX 03-3986-3272
http://www.hakuteisha.co.jp

島南端のクアール社の沖で船が座礁した事故で、このとき「クアール社のやつらはそいつらを皆殺しにしてしまい、船にあったものを全部持ってきた」という話だった。この事件は訳注一に説明されているように、アメリカ人船長のハント夫妻ら一二名が殺されたローバー号事件を指し、一八六七年三月一二日に起こった。事件の解決に立ちあがったのは、南北戦争（一八六一―六五年）で負傷し、退役後、米国駐厦門領事に赴任していたルジャンドルで、最終的に一〇月一〇日、「瑯嶠下十八社の指導的立場にあったチュラソ社に赴いて、総頭目のトキトク（卓杞篤）と会談し、漂流者を救助する協定を結んだ」（訳注一）。小説には、このとき結ばれた、遭難した「異人が赤い布の旗を掲げて来たら、助ける」という協定が、アディポンたちのあいだにも伝わっていたことが描かれている。

ただ、作者は同時にまた、クアール社に伝わる別の話を牡丹社のアルクにこう語らせている。

「クアール社のやり方は何もまちがっていないさ！ 自分たちの土地を守って、異人たちを殺したんだ、どこがまちがってる！ おまえたち、どの部落にも伝わってる話を忘れるなよ。二、三百年前に異人がクアール社の人々を虐殺した。クアール社は三人しか生き残らなかつ

た。皆殺しにしようとしたんだ。……もし異人がおれたちの牡丹社に現れたとしたら、特に理由がなくても、おれたちも首を取ってやるさ」

こうした話は、小説ではこれ以上展開されない。ただ、この言葉で、瑯嶠下一八社（恒春半島南部）の各部落には、外来者への怨恨が連綿と続いていることが暗示されている。その一方で、小説に入念に描かれているのは、若者たちを中心にしたクスクス社の日常生活である。

若者の世界はどこも変わらない。中心は恋の話。パイワン人のあいだで恋の駆け引きに欠かせないのは歌や笛だが、とりわけパイワン語でクラルと呼ばれる鼻笛は有名である（本書では、鼻笛の写真がカバー表紙を飾っている）。事件前日の夜も、恋を競い合う笛の音と歌声が部落のあちこちで聞え、その音色に聞き入るクスクス社の人々や、からかい合う若者のようすが描かれている。また、琉球人たちが部落に宿泊した夜、彼らを慰めるように奏された鼻笛の音は人々の心を深く打つ。鼻笛の登場は、作者の想像力が生んだ情景であるが、それはまた日常生活におけるパイワン人の「実像」でもあり、本書の大きな特色となっている。

事件はこのような穏やかな日常のなかで突然起こった。パイワン人たちは、遭難した琉球人たちを救おうと保存してあつ

たサツマイモを食べさせ、部落に泊めてやる。ところが、みな寝静まった夜中に強奪に来た一部の男たちへの不信任感、食事の準備のために据えられた大鍋への疑問（噂どおり、自分たちを殺して食うためか）、さらに狩猟に出かけるために武装した大勢の男たちに覚えた恐怖、それにクスクス社への入り口で見かけた髑髏が並ぶ首棚が脳裡から離れず、六六人の琉球人は夜明けまえに逃亡してしまう。クスクス社から双溪口までの逃亡と追跡の情景描写は真に迫っている。このような情景描写は、環境を熟知した作者にしか描けない。琉球人たちは、結果的には、一宿一飯の恩義に対して何の礼も言わずに逃亡した。そして追いついたカルルやアディボンと、野原や船長とのあいだで、誤解が解けないままに悲劇が起こってしまうのである。

そして、この悲劇こそがまた新たな「暗礁」となる。こうして殺害してしまった琉球人が、パイワン人にとつての「暗礁」となり、パイワン人は三年後の牡丹社事件に巻き込まれてしまうのだ。つまり、琉球人が八瑤湾の暗礁で座礁し、その結果起こった事件で五四人が犠牲となったように。パタイは、パイワン人の平和な日常生活のなかに運命的に起こった出来事として、この事件を考えている。

小説は、「あのことは、永遠に口を閉ざして、触れないま

まにしておけるだろうか。アディボンは心で思った」ということばで締めくくられている。

クスクス社と牡丹社は、その後「あのこと」、つまり五四人の殺害事件を口実に、西郷従道の軍隊による攻撃を受けることになるが、まさに難破して上陸してきた宮古島の人々は、彼らにとつての予期せぬ「暗礁」となった。これこそがパタイが用意したこの小説のテーマなのである。そして、この新たな「暗礁」とそれによって生じた牡丹社事件については、次の長編小説『浪濤』（印刻、二〇一七年）で描かれることになる。

（しもむら・さくじろう 天理大学名誉教授）